

# 小賢しい坊主

幼少の頃、私の思考世界のポケットはいつもはち切れんばかりだった。中身は、いつか使ってみたいとあちこちから集めてきた言葉達。

末っ子という言葉拙い立場に因る、発言を蔑ろにされがちな境遇。これを打破するために、少しでも大人っぽい言葉遣いがしたかった。そこで図書館や近所の大人達から集めた言葉を、すぐに使えるようにスタンバイ。闇雲に使うのでは逆に馬鹿にされるので、意味ががちりと捉えたタイミングで解き放つてやりたいと、幼い私は爪先立ちでウズウズしていた。言葉選びは楽しい遊びでもあった。

そんな七才の正月。年賀状が昼近くになっても届かず、どうしたのだろうと家族で心配していた。窓からポストの方を見ると、だから、としか言いようのないスピードで、お疲れ顔のアルバイト配達員が内股で坂道を上がってきた。来たよ！と声をかけ、集まった姉や父と窓越しに凝視している、その視線に気付いた内股君は急に顔立ちも凛々しくキビキビ動き、真面目な顔で我が家のポストに投函、颯爽と去っていった。

ポケットにびっぴりたりの言葉があると気付いた私は、ヨシ今だ！と鼻息荒く繰り出した。

「小賢しい坊主だね」

一瞬の沈黙の後、家族は大爆笑。言葉には意味とタイムングだけでなくキャラクターがあり、それが使用者とかけ離れると可笑しい、という理解のなかった私はきよんとした。

今でも使ってみたい言葉は多々あるが、ポケットではなく引き出しに、誤用しないようカテゴリー分けしてしまっている。また、役者をやっていてさらに得た感覚としては、言葉には骨格があるということだ。例えば時代劇で高い身分の奥方を演じるとなると、私生活の会話でも夫への敬語が自然と増える。猫背で「はい、わかったあ」なんて言っている人間には、しゃんとして「仰せ、かしこまっております」なんて言葉は遣いこなせない。口真似しただけではぎこちなさが漂い、滑稽に映ってしまうはずだ。

骨格を掴み、それを使いこなす筋力（普段の言葉遣い）の支えを得れば、言葉は真の力を発揮する。まさに「小賢しい小娘」だった当時の私を知ったら、きっと目を輝かせるだろう。

言葉選びは、今でもお気に入りの遊びである。



1984年、埼玉県生まれ。2003年、ドラマ「ビギナー」でデビュー後、テレビ・映画・舞台など多方面で活躍。雑誌や新聞などでの執筆活動も行う。著書に、自身の読書経験・読書生活を生かした「ミムラの絵本日和」「ミムラの絵本散歩」（ともに白泉社）、近著に10年以上の出演作全てについて130ページあまりを書きおろした『文集』（SDP）がある。